

CNAレポート・ジャパン

Conferencing industry News report, research & Analysis - CNA Report Japan

発行日：毎月 10 日・20 日・月末
創刊日：1999 年 12 月 8 日
編集 / 発行：橋本 啓介

テレビ会議・ウェブ会議・電話会議システム専門 定期レポート

2006 年インタビュー特集

編集:editor@cna.jp 広告:pr@cna.jp 読者登録:<http://cna.jp>

Copyright 2006 CNA Report Japan. All rights reserved.

インタビュー特集

DST Media 社インタビュー



DSTMEDIA

<http://www.dstmedia.com/>

話し手：DST Media Technology Co., Ltd.

副社長 Jamin Hao 氏

聞き手：CNA レポート・ジャパン編集長 橋本啓介

橋本：まずは DST Media 社の概要について教えてください。

Hao 氏：当社は、2001 年に、テレビ会議の開発経験を持っていた清華大学出身の創業者 2 名で設立されたベンチャー企業です。単なるメーカーとしてではなく、技術をもって業界の中で先頭に立つような会社を作りたいという気持ちからこの事業を立ち上げました。私は創業者ではありませんが、もともと DST Media 社の株主の一人で、DST Media 社の副社長の職をさせていただいております。社内では、事業戦略、市場開拓、そして販売の担当をしています。

当社は、技術志向の強い会社ですので、社員数は 90 名程度ですがその約半分が技術者となっております。製造工場は製造パートナーに委託しています。当社の親会社のポリコムも外部に委託して製造していますが、当社の委託先は、従来の製造パートナーですのでポリコムの製造パートナー企業とは別の企業です。



画面内には、副社長 Jamin Hao 氏（向かって最右）と開発エンジニア ランディ氏（中）、Broad5 開発技術責任者 林 朝陽氏（最左）、CNA レポート・ジャパン編集長橋本（向かって左）は、中国 DST Media 社に IP テレビ会議で取材。

当社は設立当初から MCU の開発をメインとしてきましたが、2003 年からは端末の開発も行っております。それらの機器のコアの部分になる、H.323 の通信プロトコル、そして、H.261 や H.263 などのコーデックなどは自社で開発してきましたので、外部からライセンスを受けたりなどは行っておりません。また、2003 年にはソフトウェアの著作権や技術の特許などを取得しております。

2003 年端末の開発の目的のために、端末の開発と製造を目的とした BroadSee 社（北京）と、データ会議システムを開発するリッチライク社（深セン）を、DST Media 社の子会社として設立しております。これらは会議システムとしては幅広いソリューションを提供するための事業目的がありました。

橋本：御社は中国 MCU 市場では市場リーダーですね。

Hao 氏: 当社 DST Media 社は、中国では MCU メーカーとしては強いブランド力があり、あまたある競合の中で、2004年の当社の MCU 市場でのシェアは22%。市場リーダー地位を確保しております。ちなみに、ポリコムは同市場では当社につづき第二位でしたが、昨年当社がポリコムに買収されてからは、ポリコムと当社で約50%の市場を占めています。無名の企業から MCU メーカーとしてのブランドを築くことができたのは大きな飛躍です。いろいろなメーカーなどから注目をいただいております。



橋本: 海外販売はどのように展開されてきましたか。

Hao 氏: 海外販売としては、2003年から開始しております。ドイツ、マレーシア、日本、韓国、シンガポール、米州のいろいろな販売パートナーと実績を積み上げて当社は発展してきました。その実績の甲斐あってポリコムからの買収の話となったのが昨年 2005 年 8 月です。

橋本: ポリコムが御社を買収した理由や現在の関係について教えてください。

Hao 氏: 当社 DST Media 社は現在、ポリコム傘下の企業となりましたが、ポリコムが当社を買収するに至った理由としては、当社が有能な技術集団であること、そして開発力とそのスピード、さらに市場に対する速い対応力などが上げられると思います。

昨年の夏のポリコムからの買収以来、その後はポリコムから資金や技術面での協力や支援をいただいております。当社は元々主に中国市場で展開する企業として事業をおこなってきましたが、これからは、ポリコムグループの中の開発製造の基地のひとつとして海外に向けていろいろな製品を出していくことで DST Media ブランドを確立したいと考えています。中国国内を主にした事業を行う企業から今後は国際的な企業へと脱皮していく考えで、その脱皮の変化は

買収後著しいものがあります。

橋本: 今回 Broad5 (写真左) を発売されるわけですが、まずは開発に至った経緯などをお話ください。

Hao 氏: 実際中国でテレビ会議システムの市場調査をして主要なメーカーの製品を見ますと、ひとつは会議室用、もう一つはデスクトップ用(低価格のテレビ電話や PC テレビ電話ソフトウェアなど)の、2種類しかありません。

今までのテレビ会議の発展の流れを見ると、まず80年代からしばらくは、テレビ会議は大がかりなシステムでコストが非常に高く大企業や政府など一部のところでしか導入されていませんでした。そういったところに98年からポリコムがコンパクトで高性能な、より低価格化を実現した Viewstation を発売して、従来のテレビ会議に革命を与えたわけです。それによってテレビ会議は一般企業などにも幅広く浸透していくようになってきました。

しかし、確かによくなったとはいえ、価格の面では 10 万人民币元から 30 万円の価格のためまだまだという感はぬぐえず、中小企業や個人の手が届かない価格帯であったため難しい市場状況がありました。当社としては、Broad5 を開発して、理想的には 98 年のポリコムが行ったような革命的なネクスト・インパクトを業界に与えたいという考え方を持っています。

Broad5 は、エンド価格が2万円未満です。価格が手ごろになりますので、より多くの中小企業などが使えるようになります。さらに、機能の面でも便利なものを入れて、誰でも簡単に使えるような製品を開発しないといけないという考えも持っています。

ですから、この Broad5 で従来のテレビ会議、つまり会議室用途とデスクトップのとの間の隙間を埋めたいと期待しています。潜在的な市場という観点から見れば、その隙間はかなりポテンシャルが大きいと見ています。これから数年の間にその辺りからの需要は増えると思込んでいます。

また、Broad5 は、配信機能を持った監視システムや拡張性をもっていますので、従来のテレビ会議システム概念を超

えた、いろいろな応用面で使えるとも思っています。

橋本：誰でも簡単に使えることはテレビ会議の普及促進には重要なポイントです。

Hao 氏：目標的には、Broad5 をオフィス OA 機器のワン・オブ・ゼン(One of them)としたいと思っています。今世の中にはオフィス OA 機器と言えばプロジェクタ、コピー機、FAX などみんな揃っています。オフィスの OA のひとつとしての位置づけでアピールすれば、お客様としては選択しやすいのではないかと考えています。今までの発想では、オフィス OA 機器とテレビ会議は別なものという感じがありましたので。そういった位置づけでテレビ会議を市場にアピールしていけば、ビジネスのユーザーの間で理解していただきやすいのではないのでしょうか。

橋本： Broad5 の特長についてご説明ください。

Hao 氏：この製品は低価格ではありますが、映像には、他のテレビ会議メーカーが実装している H.264 を、音声については、ポリコム製の Siren14 を採用していますので高品質な映像と音声を実現しています。また、この製品の面白いところは、PTZ カメラとウェブカメラ両方に対応していることです。会議室での用途を想定してたとえばソニーの PTZ カメラを接続してセットトップ型としても使えるし、薄型モニターにウェブカメラを使い、Broad5 をスタンドに立て、コードレスの受話器を接続すれば、デスクトップ型としても使えます。帯域は、64kbps から 768kbps、PPPoE をサポートしています。外部モニターはもとより、バウンダリーマイクなどの外部マイクも接続が可能です。

Broad5 の“5”は、5つの特長があるという意味です。それらは、まずは、(1)PTZ カメラに対応。(2)USB カメラに対応。(3)電話回線ポートを使って IP 電話が使えること。Broad5 では、Broad5 対向で IP 電話をしているところから、一旦 IP 電話を切断することなく、そのまま映像によるコミュニケーションに移行できます。(4)監視システムとしても使えます。カメラをつなぎ、リモートからウェブインターフェイスで Broad5 からの映像配信を視聴することができます。これは社長が

Broad5 を使って社内を遠隔で見たり、親が幼稚園にいる子供を見たり、などのアプリケーションが考えられます。この配信映像の品質は DVD レベルです。(5)そして最後に、拡張性です。たとえば、USB のインターフェイスが2つありますので、さまざまな外部機器を接続することによって用途の広がり期待できます。USB カメラ以外にも、USB インターフェイス(2.0)の無線 LAN、ブルートゥース、また、USB フラッシュを使い会議セッションの録画などができます。

その他のスペック的な話ですが、大きさは、233mm x 185mm x 44mm で、軽量です。言語も中国語、英語、日本語に対応します。S-Video などの入出力、音声入出力もありますし、デュアルモニター機能、遠隔カメラ操作機能など。音声関係ではエコーキャンセラー、オートゲインコントロール、オートノイズサプレッション、ネットワーク関係では、NAT トランスレーション、QoS 機能、帯域コントロール機能なども充実です。その他では、サイト表示や字幕メッセージにも対応しています。



ユーザーインターフェイス(日本語、英語にも対応)

橋本： Broad5 は、親会社のポリコムの製品と競合しませんか。

Hao 氏：Broad5は、現在のポリコムの製品ラインナップにはないタイプの製品です。現在ポリコムの競合としてはソニーとかタンバークなどがあります。無論それらの競合相手よりも、より早く市場に対応できる製品を作ったほうが戦略的にベストです。それができないと市場競争力はなくなるからです。当

社の高い開発力と市場に対する柔軟性を十分発揮してこの競争力のある製品を、つまり Broad5を開発することによって、ポリコム既存のラインナップを強化する意味での補完としての位置づけになります。

Broad5 が実装している H.264、画面ユーザーインターフェイス、リモコンなどは、ポリコムからの協力によるものです。つまり、Broad5 に実装されている H.264 は、ポリコムで開発されたものです。それは既存のポリコム端末でもまだ実装していない、H.264 のもっとも最新のバージョンを入れていません。

また、Broad5 を開発した際に米州にあるポリコムパートナー企業から製品や市場での見通しなどいろいろな意見をいただいて、全面的にこの Broad5 の開発ではポリコムからの支持を得ています。その例のひとつに、今月(2月)ポリコムの CEO ロバートハガティ氏が北京の当社を訪問し実際の開発を視察にいらっしゃる予定です。ハガティ氏はかなりの関心をもっていらっしゃいますし、市場に早くリリースすべきとご意見をいただいております。

橋本：Broad5 のリリース時期、販売方法等について教えてください。

Hao 氏：Broad5 の発売は、グローバル市場では3月頃ですが、それに先行して日本と韓国については、2月(今月)発売する予定です。

当社として直販は行う予定はございませんので、当社のパートナー企業からの販売となります。また SI や OEM の形でのビジネス協業も積極的に行っていきます。

この製品は、当初の開発意図の起点が海外となっており、中国以外、海外を主要マーケットと見ています。中国では別の要望が出る見込みなので、中国市場向けは海外でのリリースよりは若干遅れると思います。

橋本：最後に CNA レポート・ジャパンの読者へメッセージをお願い致します。

Hao 氏：日本はアジアの中でもっとも発展した国で通信インフラでも一番です。日本のテレビ会議市場はアジアの中で重要なポジションにあります。日本のニーズに対してより

スピードをもって対応し、しっかりしたサポート体制でお客様に当社の Broad5 をご利用いただければ、お客様の満足度を高められますので、日本でも頑張りたいと思っています。

日本での展開としては、当社の Broad5 製品を扱っていただけるパートナー様と個別に提携しますが、輸入から検品、マニュアル対応、日本語ローカライズなどの点においては、株式会社ブイツーテクノロジー・ジャパンで対応していただくことになっています。

Broad5 の日本発表は2月24日になります。その日には東京で午後当社のセミナーも開催する予定なので是非足を運びいただきたく存じます。

橋本：有り難うございました。

DST Media 社日本窓口：

株式会社ブイツーテクノロジー・ジャパン
代表取締役 車 暁軒 (しゃ ぎょうけん)
東京都千代田区神田西福田町 2-7 DPM神田ビル 4 階
Tel:03-3253-0811 Fax:03-5294-7818
メール：xiaoxuan.che@gmail.com sya@v2tech.co.jp

編集：CNA レポート・ジャパン 編集長橋本啓介